

提 言

子どもを大切にすることは

城 宏輔 (前埼玉県立小児医療センター病院長)

2年半ほど前に長年の病院勤めを終えて現在小児科クリニックで一次診療に携わっていますが、つくづく子どもというのは何て素晴らしいのだろうと感じています。病院勤務時代にも大勢の子どもたちに会っていたのに、病気というものに気をとられて、いかに子ども全体を見ることがなかったかと恥じ入っています。幼い子どもの澄んだ目でじっと見つめられ、何か自分の心を見透かされたような気がしてつい視線をそらしてしまったという経験があるのは私だけではないでしょう。

「子どもは社会の宝だ」、「子どもを大切にしよう」とはよく聞かれるフレーズです。なぜ大切なのでしょうか。かわいい仕草をして私たちを癒してくれるから、明日を担ってくれるから、子孫を繁栄させてくれるから、いろいろ理由はあるでしょうが、私にはただそれだけではない子ども一般に共通する、大人の持っていないかあるいはなくしてしまったただならぬものがあの目の奥に潜んでいるように思えるのです。“知情意合一”という言葉があります。はかりごとや思惑などない人間の真の姿とでもいうのか、子どもはその原型をわれわれに提示して大人の襟を正させているような気がするのです。先のフレーズはだれにも反論する余地がないため、深く考えることなく安易に使われ過ぎている気がします。もう一度子どもは自分にとってなぜ大切かあらためて考え直したうえで本気で子どもを大切にしたいものです。子育て支援も大切ですが、もっと直接子どもたちのためにできることがあるはずです。身近な子どもたちに親しみと敬意を持って真剣に接するとか、子どもたちのために大人があえて不便をするとか、大人が子どもの存在をもっと意識しているような社会でありたいと思います。そうしてはじめて宝が宝となるのではないのでしょうか。

3歳くらいの子どもの診察室に入ってきて、「どうしたの?」と聞くとだいたい「お熱があるの。」とか何か答えてくれます。ところが小学校の高学年か中学生に同じように聞くと答える前にまず母親の顔を見ることが多い。これはどうしたことでしょうか。どこかで子どもの成長が阻害されているように思えてなりません。子どもを大切にすることは子どもを教育しながらも彼らがのびのびと育つのを促すことであるはずで、親あるいは大人社会が子どもの足を引っ張ってはいけません。ただこれがなかなか難しいことで大人としては相当の人間力がいらいます。子どもを大切にしたいと宝とするには、結局は大人自身がそれぞれ常に人間性を磨いている必要があるということかもしれません。

